

<前回・プロセス神学>

(1) ホワイトヘッドの宗教哲学とその意義

→ キリスト教と自然科学、キリスト教と仏教

「ホワイトヘッドの科学哲学に基づく現代文明についての包括的な形而上学的体系の強み」

「科学、人間と文化、宗教を包括するような経験論の体系は、米国のプラグマティズムの伝統に親しみやすい多くの類似性を示していた。それと同時に、新しい科学技術の問題に対して、科学哲学と文明論に支えられたグローバルなパースペクティブを提供できた」(森田雄三郎「現代神学の動向」、『現代神学はどこに行くか』教文館、2005年、45頁)。

「プロセス神学が東洋の宗教、とりわけ仏教への深い関心を持つことは、日本人としては、とくに注目しなければならぬであろう。二〇世紀の西洋哲学の中で、仏教思想との接点を提供できる哲学は、ハイデッガーとホワイトヘッドを置いて、他に見当たらない」

(46-47)。

(2) プロセス神学の神学的な挑戦

1. 存在論とキリスト教思想

有賀鐵太郎『キリスト教思想における存在論の問題』創文社。

大林 浩 『アガペーと歴史的精神』日本基督教団出版局。

2. プロセス神学：ホワイトヘッド形而上学の概念枠によるキリスト教思想の構築

Charles Hartshorne(1897-2000), John B. Cobb, David Ray Griffin, Lewis Ford

①ホワイトヘッドの神 → 宗教の神へ ②「科学と宗教」→ 新しい有神論の定式化

3. Charles Hartshorne, *A Natural Theology for Our Time*, Open Court 1967

4. プロセス神学：ホワイトヘッドのプロセス哲学によるキリスト教神学の再構築の試み＝古代ギリシャの形而上学の概念枠に規定された古典的なキリスト教神学を乗り越え。

完全で自己完結的な神ではなく、人間および世界と相互に媒介し合いながら宇宙の創造過程を前進させる神、つまり、世界の諸存在からの影響を受けつつも(受苦可能)、宇宙を真理・美・平和の実現に向けて説得的に導く神。

5. ハーツホーン：アンセルムス『プロスロギオン』で神の存在論証のために提出した神概念、つまり、「これ以上大きなものが考えられない或もの」(aliquid quo maius cogitari non potest)をもとにして、「どうしても凌駕され得るとは考えられない存在」(the not conceivably surpassable being)という神概念を用いる。

7. 「これ以上大きなものが考えられないこと」＝「他のものによる凌駕不可能性」＝「自己凌駕性」(自分自身による凌駕可能性)。

プロセス神学が求める神：自らを越えてゆく神であり、その自己凌駕の過程で神も宇宙もより大きな真理と美の実現に向けて進展してゆく。これは、人間やそれ以外の被造物全般に自らとの共働を認めつつ、創造性の前進のためにたゆまず働く神である。

最高存在・最高価値として完全性を完成させた神(completeness、perfection)、つまり、最上級の神ではなく、それに比べれば、力の弱い神。

比較級の神：預言者からキリストへ辿られる聖書の弱き神を表現するに相応しい、単に弱いだけでなく、世界の全存在と共に苦しみ喜びつつ、最終的には宇宙の創造過程をより大きな真理と美と平和に導く。

(3) プロセス神学の射程——カブの場合

9. John B. Cobb Jr., *Postmodernism and Public Policy. Reframing Religion, Culture, Education, Sexuality, Class, Race, and the Economy*, State University Press of New York Press, 2002. Chapter Five. Nature, Community, and the Human Economy

10. John B. Cobb, Jr., "Christianity, Economics, and Ecology," in: Dieter T. Hessel and Rosemary Radford Ruether (eds.), *Christianity and Ecology*, Harvard University Press, 2000.

1) 新しいコンセンサスと現状

①状況 (497/1,2)

- ・人間中心主義と二元論について悔い改めるべきである、というコンセンサス

2) キリスト教の問題性と課題

①キリスト教徒はなぜ破壊を伴う科学技術を支持するのか(499/6-501/1)

- ・科学技術は貧困を縮小する（必要なものを生産し雇用を創出する＝豊かにする）
- ・キリスト教徒の価値観と経済学者とのそれとの近接性（物質的な必要を満たすという目標の共有）

- ・人口増加・人口爆発（伝統的価値観における生命の神聖性、家族の重視）

医学の進歩、人間の生命を救うことは、我々の遺産・魂に深く根ざしている

②自然世界の保持へのコミットメントをはっきりと表現すること(501/2-503/1)

- ・科学技術のあり方の転換
- ・個々の建物や都市全体を少ないエネルギーと資源によって建設すること
- ・資源の再利用・リサイクル
- ・食物などの農産物の持続可能な形式の発展、一年生穀物を多年生穀物に代える
- ・食生活習慣の変化による土地利用への影響
土地の適した利用（食肉用動物のための牧草地、穀物生産→人間が直接消費する）

3) 政策レベルの問題とキリスト教

①税政策の転換(503/2-504/2)

- ・逆進的な税や給与税から資源税・汚染税へ
- ・建築や改築を無税に土地にのみ税を課す、土地投機を抑制し、有効利用を促進する土地の利益は共同体全体に属している（ヘンリー・ジョージ）

②税と予算による人口増加への抑制効果（歳入歳出政策）(504/3,4)

4) 経済成長とキリスト教

①キリスト教徒は支配的な経済的实践と理論とを批判しなければならない(504/5)

経済成長至上主義を断念すること。倹約を支持するキリスト教的価値の内面化。

②放棄できない特定の目標と一般化された経済成長（破壊的）との区別

キリスト教の目標はすべての人々が良き（快適・健全な）生活のための物質的手段を持つこと

③成長志向的な政策と権威主義的な強制によらない貧困の克服の例(506/3,4,5,6)

インドのケララ州の場合：女性による女性の教育

5) キリスト教の転換と経済・エコロジーの新しい関係

①キリスト教共同体内での必要性(506/7-507/3)

地球・大地が神の被造物であること、人間はその一部であること、神はそこにそれを通して見出されること、これらを強調すること

→ 神学の悔い改め：人間が大地の上にあるいはその外に立っているかのように考えることによって、大地の幸福をほとんど考慮せずに大地の搾取を許してきた思考と感情における、習慣的となっている人間中心主義的なパターンを転換すること社会的責任の感覚、社会分析の重要性の感覚の回復

8) 政治の復権とキリスト教の責任

12. まとめ

・環境と経済・政治とは一つの問題系を構成している。キリスト教思想研究は、問題系の再確認から議論を再構築する必要がある。そのための基礎理論としての自然神学の再考。

倫理的設定では射程が狭い。

・キリスト教思想の根本へ、そこから議論を構築すること。つまり、聖書解釈が争点となる。

12. ハイデッガーと解釈学的神学 1

0. キリスト教思想にとって、哲学はいかなる意味を有しているのか。

キリスト教思想にとって、ハイデッガーは何者か。

1. ハイデッガーとキリスト教との関係をめぐる問題の整理 (『続・ハイデッガー読本』法政大学出版局、2016年。「コラム⑥」バルト、ブルトマン、ティリッヒ ハイデッガーと二十世紀神学)

(1) 問題・概観

(2) 諸動向について

(3) まとめ・評価

(1) 問題・概観

3. Judith Wolfe, *Heidegger and Theology*, T & T Clark, 2014.

Note on the text

Abbreviation

Introduction

1 Heidegger's Catholicism (1889-1915)

2 Heidegger's Protestantism (1916-1921)

3 The emancipation of philosophy (1921-1929)

4 Theology in Being and Time

5 Heidegger between Hitler and Hoelderlin (1930-1935)

6 The later Heidegger (1935 and beyond)

7 Heidegger among theologians

8 Heidegger in theology

Bibliography

Index

4. 研究対象と研究との錯綜した関係について。

「ハイデッガーとキリスト教」を論じる際の検討対象として、まず挙げられるのは、ハイデッガーと同世代のキリスト教思想家のハイデッガー論である。しかし、ここですでに一つの文献についての二重の取り扱いが必要になる。たとえば、ティリッヒの『社会主義的決断』(1933年)は、「ハイデッガーとキリスト教」を論じる題材にもなるし、あるいはこのテーマについての一つの先駆的な研究としても位置づけうる。

5. こうして、研究史をまとめるのは、思いの外、難しい作業になる。

また、取り上げる文献を、単行本に限定するのか、雑誌論文をも加えるのか、さらには、博士学位論文はどの程度視野に入れるのか、そして、辞書の項目などの中における「ハイデッガーとキリスト教」への言及や、学術書以外における論評・エッセイは無視するのか、こうした点、つまり検討範囲も問題になる。

実際、本や論文のタイトルだけからは、想定できない仕方で、「ハイデッガーとキリスト教」についての重要な議論が含まれる場合があり、研究史を分析整理する作業は切りが無いものとなる。たとえば、次のものは、きわめて重要であるにもかかわらず、「ハイデッガーとキリスト教」というキーワードによる表面的な調査(検索)においては見落とされる可能性があるものである。

6. 辻村公一「ブルトマンとハイデッガー——信仰と思惟——」(『ハイデッガー論攷』創文社、1971年、の附録一)。

- 一 序言。問題の説明
- 二 出會の時
- 三 出會の前
 - (A) ブルトマンとヒストーリエの問題
 - (B) ハイデッガーとメタフュージックの問題
- 四 ブルトマンとハイデッガーとの相違と相應
 - (A) 世とひと
 - (B) 神の啓示と無の開示
 - (C) 終末論的今と瞬間
- 五 結語。信仰と思惟

7. しかし、どうして「ハイデッガーとキリスト教」なのか。キリスト教にとっていかなる意味があるのか、哲学にとっていかなる意味があるのか。

(2) 諸動向について

8. 隣接分野（宗教哲学・現代思想）との差異化と整理方針
- ・隣接分野におけるハイデッガー論との差異化による、キリスト教思想の独自性の解明。
フランス、イタリア、最近のアメリカ（カプート）はキリスト教というよりも宗教哲学
 - ・動向の整理の視点：世代／地域／教派

9. 同時代（1920年代～1960年代）、次の時代（1950年代～1980年代）、さらに次の時代（1990年代以降）

- ・時代区分としては、
ハイデッガーと同時代（1920年代～1960年代）：バルト、ブルトマン、ティリッヒ、またボンヘッファーもそれに加えることができるかもしれない。
ハイデッガーの次の時代（1960年代～1980年代）：エーベリンクやフックス、またユンゲルなどのポスト・ブルトマン学派、すでに本ブログで取り上げたマッコリーあるいはギルキー、トレーシー、そしてラーナー、ブーリ、パネンベルクやモルトマン。
そしてさらに次の時代（1990年代以降）。

この最初のハイデッガーと同時代に属する思想家は、このテーマの題材となりうる位置を占めており、最も最近の時代に属する人々は、むしろこのテーマについて専門研究を行っている人々ということになる。中間の世代は、その点、位置づけが難しい。

10. ドイツ

Otto Pöggeler, *Philosophie und Hermeneutische Theologie. Heidegger, Buttmann und die Folgen*, Wilhelm Fink, 2009.

- 1) 同時代：バルト、ブルトマン、ティリッヒ、ボンヘッファー、
『存在と時間』（1927）に至るハイデッガーが焦点。
- 2) ブルトマン学派、フックス、エーベリンク、ユンゲル
中期以降のハイデッガー
- 3) ブーリ、オット（『思考と存在——マルティン・ハイデガーの道と神学の道』白水社、1975年）、パネンベルク

11. 同時代のドイツ神学

- ・バルト：KDIII/3(S.395) → 拒否
- ・ブルトマン：1920年代の思惟（*Glauben und Verstehen I*, J.C.B.Mohr, 1933）で、Existenz 概念を使用。Welchen Sinn hat es, von Gott zu reden? (1925)
- ・ティリッヒ：*Die sozialistische Entscheidung*, 1933 (MW.3)

Einleitung: Die beiden Wurzeln des politischen Bewußtsein

1. Menschliches Sein und politischen Bewußtsein

Die Wurzeln des politischen Denkens müssen im menschlichen Sein selbst aufgesucht werden.

ein Bild des Menschen, eine Lehre vom Menschen

Der Mensch ist im Unterschied von der Natur ein in sich gedoppeltes Wesen.

die menschliche Frage nach dem "Woher", Geworfensein, der Ursprung

Das ursprungsmythische Bewußtsein ist die Wurzeln alles konservatischen und romantischen Denkens in der Politik.

die Frage nach dem "Wozu", die Forderung

Die Brechung des Ursprungsmythos durch die unbedingte Forderung ist der Wurzel des liberalen, demokratischen und sozialistischen Denkens in der Politik.

Die Forderung, die von dem zweideutigen Ursprung losreißt, ist die Forderung der Gerechtigkeit..... Gerechtigkeit ist die wahre Macht des Seins. ... Der Ursprungsmythos darf nur gebrochen, enthüllt in seiner Zweidrigkeit, in das politische Denken eingehen.

基礎的人間学：社会的構想力 → 政治思想の二つの系譜

「世界一内一存在」（「自己一世界」、「運命一自由」）「被投性一企投」

「起源一要請」、起源神話とその突破（預言者、ヒューマニズム）→ 起源の両義性

実体原理（形成原理）と修正原理（批判原理）

↓

政治的ロマン主義（保守的あるいは革命的）とその意義

自由主義・社会主義とその限界

↓

宗教的社会主義の課題：社会主義と起源の力の再統合、合理性と非合理性

- ・ボンヘッファー：現代キリスト教神学の文脈におけるハイデッガー

Akt und Sein. Transzendentalphilosophie und Ontologie in der systematischen Theologie, 1931.

12. 英語圏、日本、そのほか

・地域的言語的には、ドイツ語圏と英語圏が中心になることは言うまでもない。哲学者に注目すれば、フランスやイタリアも重要であり、また日本における議論の状況も独立して扱うことが必要であろう。

13. 英語圏：ギルキー、マッコリー、トレーシー

Langdon Gilkey, *Reaping the Whirlwind. A Christian Interpretation of History*, The Seabury Press, 1976.

David Tracy, *The Analogical Imagination. Christian Theology and the Culture of Pluralism*, Crossroad, 1986.

- ・マッコリー

ジョン・マクウォーリー『ハイデガーとキリスト教』勁草書房、2013年。

John Macquarrie,

God-Talk. An Examination of the Language and Logic of Theology,

The Seabury Press, 1967.

- ・ John Macquarrie, *An Existentialist Theology. A Comparison of Heidegger and Bultmann*, Penguin Books, 1955.

- ・ *Existentialism*, Penguin Books, 1972.

実存主義の哲学者ハイデッガーの神学的意義

cf. ティリッヒの「実存哲学」(Existential Philosophy, 1944. in: MW1.)

14. 日本語圏：野呂芳男、小田垣雅也、花岡永子、沖野政弘、茂牧人・・・

1) 小田垣雅也

・『解釈学的神学』創文社、1975年。

たとえば、「第四章 解釈学と神学」では、言葉・解釈という視点で、前期から後期のハイデッガーが論じられる。その上で、「第五章 解釈学的キリスト論」における「言葉の出来事」「イエスの譬え」との関わりにおけるブルトマン学派の議論の分析や、「第六章 解釈学的神学と神」での現代神学の諸動向の分析は展開されている。

ブルトマン学派におけるハイデッガー受容が小田垣の視点から、明確に分析されている。

・『哲学的神学』創文社、1983年。

ハイデッガーについてのまとまった大きな議論がなされているわけではないが、「第2章 現象学、解釈学、神学」や「第3章 「関係」「間」「一」」においては、ハイデッガーの議論が神学の方法論を論じる中で、いわば不可欠の役割において登場する。自らの方法論の構築展開におけるハイデッガー論といった感じであろうか。

・『現代思想の中の神——現代における聖霊論』新地書房、1988年。

ハイデッガーについての議論は、次の現代思想の文脈との関わりにおいてなされている。「第四章 「言葉への転回」と現代神学」、「第五章 ログスの終焉」。

2) 花岡永子

・『絶対無の哲学——西田哲学研究入門』世界思想社、2002年。

この文献は、タイトルからもわかるように、西田哲学、絶対無の哲学がテーマであるが、そこにハイデッガー論が組み入れられている。たとえば、「第II部 絶対無の表現の問題」の「第2章 哲学における「同一性」と「自己同一性」の問題」では、副題が「ハイデッガーと西田幾多郎の哲学を介して」であり、「第1節」が「ハイデッガーにおける「同一性」の問題」となっている。また、続く「第3章 神の概念の問題」でも、「第1節」の「5-⑤ 仏教者にしてハイデッガー研究者である哲学者・辻村公一の場合」となっており、「第III部 絶対無に働く霊性」の「第3章 「過程」と「場の開け」の問題」と「第4章 有機体の哲学における時と永遠の問題」では、ホワイトヘッドとともにハイデッガーが集中的に扱われる。

・『「自己と世界」の問題——絶対無の視点から』現代図書、2005年。

ここでもハイデッガーは中心的な思想家として位置づけられる。特に、まとまった議論としては、「第二章 「身心一如」と「根源的のち」の「二 自然と技術の問題——絶対無の視点から」における「ハイデッガーの技術論」が挙げられる。

3) 沖野政弘『現代神学の動向——後期ハイデッガーからモルトマンへ』創文社、1999年。

15. プロテスタントとカトリック

出発点としてのカトリック、関わり合いにおける現代キリスト教思想としてのプロテスタント。

ラーナー

16. キリスト教思想はハイデッガーの何に注目してきたのか。

1) 哲学的人間学としてのハイデッガー (『存在と時間』)

・バルト、ブルトマン、ティリッヒ、ボンヘッファー

世界内存在＝時間性、本来性と非本来性

・近代キリスト教思想におけるハイデッガー：ティリッヒ、ボンヘッファー

神学のパートナーとしての哲学

↓

・マッコーリーもこのライン (実存論的神学)

2) 言葉の出来事、イエスの譬え：

ブルトマン学派 (エーベリンク、フックス、ユンゲル)、オット

・ Eberhard Jüngel, *Paulus und Jesus. eine Untersuchung zur Präzisierung der Frage nach dem Ursprung der Christologie*, J.C.B. Mohr, 1962.

・ 小田垣雅也

・ クロッサン: *In Parables. The Challenge of the Historical Jesus*, 1973.

3) 存在理解、真理理解

存在の歴史性、存在と存在するものの存在論的差異の理解

真理の歴史性 (ティリッヒの「真理の動的的理解」)

ティリッヒ (カイロスにおけるロゴス。Kairos und Logos, 1926)

↓

類似しているのは偶然ではない。時代と伝統の共有。

(3) まとめ・評価

17. キリスト教との関連性

キリスト教神学の側でハイデッガー哲学に関心をもつのは、次の二つの場合。

ハイデッガー哲学が、人間学として、あるいは言語理解において、キリスト教思想にとっても有益である。

ハイデッガー哲学は、表面的には無神論的と見えても、実はキリスト教あるいは聖書の思想と緊密な関連がある。否定神学あるいは神秘主義の系譜でハイデッガーを理解する。

18. ハイデッガーと聖書的思惟の隠された関係

・ マルレーヌ・ザラデル『ハイデッガーとヘブライの遺産——思考されざる債務』法政大学出版局、1995年。

・ 茂牧人『ハイデッガーと神学』知泉書館、2011年。

・ 「ハイデッガーとキリスト教」とをテーマ化する上で問題となるのは、両者が表面的な断絶にもかかわらず根本的なレベルで緊密に結び付いているという研究者の予想である。キリスト教研究者が「ハイデッガーとキリスト教」を論じる際に、しばしば前提とされているのは、この予想であり、それを展開するために設定される設問が、神(々)、存在、言葉、存在史、人間理解、そして否定神学、神秘主義などなのである。

しばしばこうした問いの立て方は循環論法に陥ることになる。

19. しかし、いずれにせよ、ハイデッガーと同時代以降のキリスト教神学との間に、単純な影響関係などを想定するだけでは、奥行きのないつまらない議論になる恐れが多分にあるものと思われる。むしろ、ハイデッガーと現代キリスト教思想とは同じ伝統(この伝統に、神秘主義、否定神学、言語論、人間理解などが属している)と歴史時代を共有していることから、両者の関係を考えるべきである。

20. Paul Tillich, "Heidegger and Jaspers,"(1954) (Alan M. Olson (ed.), *Heidegger & Jaspers*, Temple University Press, 1994, pp.16-28.)

And this leads me to my final point: When you deal with existentialists, don't go to them in order to find answers. The answers one finds in the later Heidegger, for example, do not come from existentialism but from the medieval Catholic mystical tradition within which he lived as a seminarian. The answers one finds in Jaspers come not from existentialism but from the classical humanist tradition or, more precisely, German Idealism; and the answers one finds in Gabriel Marcel come not from existentialism, but from classical Catholic orthodoxy. So also the answers one might find in Kierkegaard come from Pietistic Lutheranism, and in Nietzsche, from the philosophy of life with all of its romantic ambiguities and divine-demonic dimensions. Or if you take the early Marx and call him an existentialist, as I would do, then it is the classical tradition of the revolutionary sect going back to biblical propheticism which motivates him. (27)

19. マルレーヌ・ザラデル『ハイデガーとヘブライの遺産——思考されざる債務』

・問いと方法論の明確さ、分析の一貫性、結論の意義。

「そもそも初めから、それを思考することが禁じられていたからなのだ。この禁止は、ハイデガーの仕事のなかで一貫して維持される二重の還元依拠している。まずは（ギリシャ語で書かれた）新約への聖書の還元であり、さらに今後は、この新約のテキストが信 (foi) という純粹経験へと還元されるのである。」(8)

「以上のことから、キリスト教に関するハイデガーの理解が帰結する。ハイデガーによると、キリスト教はそれが有する数々の次元のうち二つによって全面的に解明される。ひとつは信（思考の秩序とは無縁だということが信の特徴である）であり、いまひとつは存在-神学（ギリシャ思想に還元可能なものであることがその特徴である）である。ということはつまり、キリスト教の根源的な唯一の特徴（十字架につけられた神への信仰）はまったく思考に係わるものではなく、キリスト教を思考に係わらせる特徴はなんらキリスト教固有のものではないのだ。後者は、ギリシャ人たちのすでに思考していたこと、あるいは少なくとも予示していたことが姿を変えたものなのだ。」(8-9)

「ヘブライの巨大な集積について大いに注目すべき沈黙をまもったハイデガーが、それにもかかわらずこの集積と係わっているのであれば、この係わりは必然的に秘密の係わりであり、偽装された係わりであろうから、その二重の錯綜を解くことが問題となろう。二重の錯綜と言ったが、一方ではハイデガーの思考に押された旧約の遺産の刻印を示し、いま一方ではそれに併行して、ハイデガーがいかにしてこの遺産を隠蔽しているかを示さなければならないのである。」(21)

「こうした読解の可能性」「ハイデガー自身からでないとしたら、誰から引き出すのだろうか。」(21)

「形而上学という措辞がハイデガーの進展のなかで二重の拡張をこうむった」「西洋の歴史のあらゆる次元をカバー」(27)、「この歴史の流れの全体をカバーするものと化した」(28)

第二章 言語の問い 第三章 思考の問い 第四章 解釈の問い

「言語の特殊な実践（釈義や言葉の上での遊び）が問題あるにせよ、存在との関係における言語の関係が問題であるにせよ、対話としての言語の展開が問題であるにせよ、あるいはまたこの対話が真に成就される場としての媒介者が問題であるにせよ、本章では、言語へのハイデガー的なアプローチと、聖書ならびにそれを援用する伝承が証示するようなアプローチとの決して当然のことならざる類似にわれわれが直面していること、この点を示そうと努めたのだ。・・・ここで困惑を引き起こすもの、それは類似そのものではなく、この類似を包み込む沈黙である。」(83)

<参考文献>

1. Otto Pöggeler, *Philosophie und Hermeneutische Theologie. Heidegger, Bultmann und die Folgen*, Wilhelm Fink, 2009.
2. 森一郎『死と誕生——ハイデガー・九鬼周造・アーレント』東京大学出版会、2008年。
3. ディディエ・フランク『ハイデッガーとキリスト教——沈黙せる対決』萌書房、2007年。
4. K・リーゼンフーバー『近世哲学の根本問題』知泉書館、2014年。
第三部 超越理解と宗教論——フィヒテ、ハイデガーをめぐって
第十二章 ハイデガーにおける神学と神への問い
一 神学によるハイデガーの受容
二 『存在と時間』までの発展
三 神学と哲学
四 形而上学とキリスト教における神理解への批判
五 存在の思惟における神への問い